

発 表 要 旨 ・ 資 料 集

目 次

大会実行委員長あいさつ	清原 正田	1
大会プログラム		2
シンポジウム発表要旨	野口 一雄	4
	荒木 志伸	6
	相原 一士	8
研究発表要旨		10
山寺夜行念仏関係資料	村山 正市	24
山寺関係絵図資料		28
山寺略年表		33
山寺に関する記述内容の比較	鈴木 岩弓	35
山寺関係参考文献		35

日本山岳修験学会山寺立石寺学術大会実行委員会

2019年8月31日・9月1日・2日

大会実行委員長あいさつ

寶珠山立石寺住職 清原正田

此の度、第40回日本山岳修験学会大会が、当山形県で開催されるに当たり、全国各地より大多数の方々に御来県いただきました事、誠にありがとうございました心より感謝・歓迎いたします。

当山形は、古来より出羽三山を代表とする日本の修験道の聖地でもありました。県内には、出羽三山の外にも、多くの修験の靈地が残り、各地でその伝統を守ってまいりました。残念ながら、一部の靈地では、かつての勢いは無くなり、年に一・二回行われる祭礼にその名残を見るだけになってしまった処もありますが、それでもその地域の住民によりその伝統が守られ、継承されているものが多くあります。

すでに御承知の通り、我が国における修験道は、神道の考えに、仏教の理論と実践の方法を取り入れ、独自の発展をとげて來たと思っておりますが、私は仏教特に天台宗の僧侶でありますから、その方面からの見方をお許し願えれば、次の様な意見を持つ者であります。

そもそも我が天台宗の立宗の精神は「法華経の教え」を中心にし、仏道の修行を重ねて、世の中の人々に安楽な生活が出来る様に導く、と言ったものであったと思われますが、ほどなく、当時中国「唐」で隆盛していた「密教」の教えを取り入れる事となります。

密教は、大日如来を本尊として中央に置き、宇宙の全ての事は、大日如来によって決められている。と、言った様な事が中心となります。その大日如来の周囲に、觀世音菩薩や不動明王等、多くの仏様方がおられて、人々の色々な願い事を聞き届けて下さる。となるのですが、これが、日本古来の神道の考え方と上手に同化し、その中から修験道も生まれて來たと思っております。

いずれにしても、修験道の歴史を探って行く事は、日本人が古来持っていた「自然との協調を計り、自分達の生活を守り発展させて行く」との思いを確かめて行く事に繰がるものと思っております。

本日より会期が終了するまでの間、大いに議論を深め、互いの見識を深めていただければと思っております。

大会プログラム（8月31日）

開会式（13時30分～13時50分）

挨拶（日本山岳修験学会長、大会実行委員長、来賓）

公開シンポジウム

（1）基調講演（13時50分～14時30分）

テーマ：山寺立石寺の歴史と信仰

講 師：清原正田＜大会実行委員長・宝珠山立石寺住職＞

（2）シンポジウム（14時30分～17時20分）

テーマ1：山寺の民間信仰

講 師：野口一雄＜村山民俗学会前会長＞

テーマ2：山寺の石造文化財

講 師：荒木志伸＜山形大学准教授＞

テーマ3：山寺の民俗芸能

講 師：相原一士＜山寺芭蕉記念館学芸員＞

（報告終了後に質疑応答準備のため、10分間の休憩、質問票回収）

司 会：原淳一郎＜県立米沢女子短期大学教授＞

コメント：伊藤清郎＜山形大学名誉教授＞
新関孝夫＜山寺郷土研究会＞

一般研究発表プログラム（9月1日）

	開始	終了	氏名	所属	題目
1	9:30	9:55	長瀬 一男	山形県	山岳寺院立石寺創建の考察—貞觀二年が意味するもの—
2	9:55	10:20	中川 仁喜	大正大学文学部	立石寺円海について
3	10:20	10:45	時枝 務	立正大学	立石寺史の画期とその意義
	休憩	10分			
4	10:55	11:20	林 京子	高勝寺プロジェクト	東叡大山羽黒三山学頭檀那院胤海の生涯
5	11:20	11:45	三ツ松 誠	佐賀県	西川須賀雄の初期思想
6	11:45	12:10	神宮 滋	北方風土社中	出羽三山の比定と本地仏一鳥海山を中心に—
	休憩	40分			山寺の民俗映像を上映予定
7	12:50	13:15	吉野(筒井)裕	帝京大学文学部	近代の東北地方太平洋沿岸地域におけるお山参り
8	13:15	13:40	花井 紀子	埼玉県	庄内天保三方国替えにおける鳥海山大物忌神社の関わり
9	13:40	14:05	大田黒 司	開新高校・神奈川大学大学院生	天草下島 帽子岳における民間信仰
10	14:05	14:30	白田 依里佳	法政大学大学院生	加賀山代温泉「菖蒲湯祭」と修験者らの関わり
	休憩	10分			
11	14:40	15:05	荻野 裕子	奈良教育大学 非常勤講師	伊勢の修験系富士講-伊勢參詣曼荼羅の中の富士-
12	15:05	15:30	早栗 佐知子	西宮市立郷土資料館	西宮神社の雨乞いと六甲山の石宝殿
13	15:30	15:55	簎 元晶	御影史学研究会	役行者簎面寺開創伝承の成立について
14	15:55	16:20	牛山 佳幸	信州大学特任教授	いわゆる「女人高野」の起源と諸類型

山寺の民間信仰～伝えられる民間信仰と、いくつもの境界と異界～

野口 一雄

1 記された山寺

(1) 教材

- ①『山寺状』(享保 11／松本一笑軒の著)

近江国日野の人。谷地（現河北町）を訪れ 10 数年間滞留。1683 年（天和 3）没。1726

年（享保 11）京都の洛陽書林から出版。弟子田宮梅隱序文、福田章山が跋文。

「一當山ハ紀州高野山と同くして諸人卒都婆を供養し碑をたて兼而永世を期す・・・」

- ②『山形縣地誌提要』(明治 11.7／山形荒井太四郎編)

(2) 民間信仰

- ①『乩(けい)補出羽國風土略記卷拾之中』(1)

「四月中の申の日、七月七日に祭礼あり、郡中より貴賤群集して、飽くずに法名を注し 是をかなから佛といふ 香華水を備て回向をなして下山すること國の風俗となる」

- ②『山形石ひろい』(2)

「秋は七月になれハ、山寺立石寺殊外賑わしき事そかし、山形の人々ハ、盆にはなき人の戒名、或は卒塔婆・付木（笹塔婆）なんとに書付、山寺に立ねば、其亡者うかまぬ様に覺しとか」

- ③『山形掌故』(3)

「秋ハ七月七日になれば山寺の立石寺殊の外賑成そかし（略）山寺立石寺、慈覚大師之開基ニテ高野山之写之由、高山也（略）上の坂の上りめくに寺十二ヶ寺有、左之方天狗岩有、極楽寺と云有、右之方に胎内くよりといふ有、右不動（ママ）も有、珍敷ほり付たり、左仏滻・不動（ママ）清水出る所、惣而岩三戒名書付有、爰を凡奥院共岩屋共云、最（ママ）かんなくず（笹塔婆）に戒名書、水たむけ致回向、とつ鈷の水とて井有、經木一本六文、水一杯壱文つゝ也」

- ④『最上千種（ちぐさ）』(4)

「一、山寺山王權現、祭礼三月廿五日、四月中の申、七月七日の申ニハ祭り出ル（略）高野（ママ）の写也、若し定燈火きへ候へハ、高野より持来ルと云、高野の火消えれハ、山寺より持参る由、至而景地也」

- ⑤『如法経所碑』(天養元年（1144）8月 18 日)

「眞語宗僧入阿」

2 描かれた山寺

- ①『山寺状』に載る絵図

- ②「羽州山寺立石寺寶珠山略繪圖」(文久元年／1861。以下、「文久絵図」)(5)

3 いくつもの境界と異界

(1) 地蔵堂と産橋 (むめはし)

①地蔵堂と大きな五輪塔

「従是内殺傷禁断」(「文久絵図」)

「地蔵堂 地蔵尊 ろくどうの のうけ(能化)のじぞうは あらわれて くどくむりよう(無量)の ほとけたちまし」(高嶺夜行念佛 石山長之助本。(以下、「長之助本」))

②「産橋」(「無明の橋」の意であろう)

「産橋／みやまぎ (深山木) は どこかいづくと ながれきて いまはろくじ (六字・南無阿弥陀仏) の はしとなるらん」(「長之助本」)

(2) 阿所川と橋殿

①阿所川

阿所川院宝珠山立石寺

「阿所川／みらへゆく さんずのかわも ふかければ みだのおしいや かくそありける」
(「長之助本」)

②橋殿・ハシドノ

「橋殿／このはしは しょぶつかけたる はしなれば わたりてじょうぶつ うたがいそなし」(「長之助本」)

(3) 仁王門から奥の院

①「仁王門」(元十王門)

「仁王門／このもんは しゃばとめいどの あひのもん かぎであくとは おもふなよ むつのろくじで あけさせさまへ しゃかほとけ」(「長之助本」)

②「奥の院庭／ながむれば るりのはちしの はなのやま くほんじようど (九品浄土) の ほとけたちます」(「長之助本」)

(4) 極楽院と義光靈屋

奥の院から天狗岩への登り近くにも境界地サイノ河原があった。「山寺状絵図」に、「ぢざう堂」、「十王堂」、「あみたたけ」がみえ、「こくらくいん」、「よしあきたまや」が記されている。阿弥陀岳直下のこの地が極楽浄土と信じられたときがあった。

4 山寺の名所 (文久3年(1863)亥年7、荒谷村(現天童市)荒谷村村形忠三郎写書) (6)

注(1)『山形市編集資料』第33号／1973

注(2)『山形市史資料』第64号／1982

注(3)『山形市史編集資料』第21号／1973

注(4)『山形市史編集資料』第31号／1973

注(5)個人蔵

注(6)山形大学附属博物館蔵

立石寺の石造文化財

荒木志伸

1.はじめに

石造文化財は、往時の人びとの来世観や世界観、宗教の役割、家族やムラの在り方などにアプローチできる歴史的資料である。近年、各地で墓標をはじめ石造文化財の悉皆調査が盛行している。文献史料等が限られたエリアでも豊富な歴史的情報を獲得でき、人々の信仰・精神面などの実態面に迫ることができる。また、形式や石材といった考古学的観点から検討することで、地域の特性や交易の様相を解明できる可能性がある。

山寺立石寺には、人々の信仰に纏わる行為が蓄積されて形成された石造文化財が多数残されており、靈場としての景観を形成する重要な要素になっている。石造文化財調査の概要と、現段階における成果と課題について発表する。

2. 石造文化財の調査

立石寺の参道には、石造文化財が約 1200 基存在する。主に、その種類は磨崖供養碑、石塔、石燈籠などの種類にわかれ。以下、種類別に概要を述べる。

(1) 磨崖供養碑

直接岩に刻むもので、石塔婆とも称される。総数は 256 基で、そのうち 233 基が参道沿いに営まれる。その形式は 2 点をのぞき、すべてが板碑形である。

年代は最古の年号は、元和 9 (1623) 年、最新のものは天保 9 (1838) 年で、すべてが近世期の所産であった。約 3 割の紀年銘が解読できており、17 世紀第 3 四半期と 18 世紀第 1 四半期に 2 度の小規模な造立のピークが認められそうである。なお、古い紀年銘を有するものほど、法量的に大きい傾向にある。

刻まれていた主な文字内容としては、紀年銘・戒名・地名・施主名などがある。紀年銘は戒名と共に刻まれることから没年と考えられる。1 基あたり 1 名から最大で 8 名の戒名が確認できる事例があった。また、戒名には「譽」や「釈」などの文字が含まれるものがあり、こうした浄土宗や浄土真宗の戒名は近世前期から確認できることに注目したい。

地名に関しては従来「山形横町」「山形六日町」「西里村」「新庄舟形町」「高橋村」「寒河江西町」「下野国都賀郡日光」等が確認できていたが、その後の調査で「上山」「仙臺秋保」の地名が新たに発見された。また、施主名として「片桐市郎兵衛」「市村惣兵衛」「市村口衛門」「市村一良治」「市村太良治」「大沼口口口(惣兵衛か)」「伊藤金兵衛」「和久井次左衛門」「邊見口口口」「大沼重三口」「大沼想右衛門」などが確認できている。

(2) 石塔

鳥居忠政に関わる宝篋印塔と、家老高須弥助信次、老臣猪狩加次衛門恒光の板碑形石塔 2 基が寛永年間の建立で最古級である。これらが、山内の石塔類の建立の契機になった可能性がある。参道では姥堂脇の寛文 4 (1664) 年の自然石形の石塔が最古である。

形式は、板碑形・無縫塔・自然石・櫛形・角柱（丘状・丸状・平頭・尖頭）・有像舟形・有形形（地蔵など）がある。板碑形の数が非常に少ないが、その背景については磨崖供養碑との関係を考慮すべきであろう。また、山麓域の墓地等に比して、山内では有像舟形の石塔の割合が多いことも特徴といえる。

石塔は近代に入つても建立されるが、基本的には近世の所産である。磨崖供養碑と文字の内容については基本的に共通しており、これは石燈籠に関しても同様である。「大乘妙典」「一石一石供養塔」の文字が刻まれるものや、寒念仏供養、夜行念仏供養塔や空也塔などもある。

3、分布と造立の挙げ

磨崖供養碑は、弥陀洞や百丈岩を臨む四寸道周辺などの参道内でもランドマークとなるような地点や、山内の堂舎の近くに建立されることが多い。石塔類は、鳥居忠政供養塔や姥堂近くといった比較的標高の低い場所から出現していくようだ。ただし、寺内の石塔類は移動に伴い、元位置については注意が必要である。いずれにせよ、現在のような様々な石造文化財が林立する景観は、近世以降に段階的に形成されたものといえる。

4、現段階における成果

石造文化財は近世以降の所産で、立石寺を支えた人々が先祖供養等を目的として建立したものと考えられる。一族や家を単位とした供養に関わる参拝行為がうかがえ、施主名や地名からは山形県村山・最上エリアの人々が支えた靈場としての姿が浮かび上がってくる。出羽三山にみえるような講を基本としたような登拝ではなく、あるいは中世期の個々人の納骨行為の延長線上に位置付けられるものといえるだろう。

『奥の細道』三二段には「一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、其間七里ばかり也。」（元禄2年（1689））とあるが、芭蕉來訪時には数十基の磨崖供養碑や石塔が営まれ始めていた景観であった。

参考文献

- 川崎利夫「山寺立石寺とその周辺の石造文化財」『日本考古学協会 2009年度山形大会研究発表資料集』2009
拙稿「立石寺の靈場変遷と景観」『考古学雑誌』第96巻第4号、2012a
拙稿「山寺立石寺」『季刊考古学』第121号、2012b
拙稿「立石寺の磨崖供養碑にみえる地名について」『村山民俗』33号、2019

山寺の民俗芸能

相原一士

夜行念佛

「山寺の夜行念佛は、念佛（「南無阿弥陀仏」の名号）または回向文（5・7・5・7・7から成る供養文）を声明の節回しで唱え、祖先の靈を供養し、または神仏を讚える行事で、毎年8月6日の夕刻から翌日、8月7日の朝まで行われる」

夜行念佛の起源を明確に示す史料は今のところ確認されていないが、立石寺境内の山中に天保14年（1843）建立の「夜行念佛」碑がみられる。また、県内のその他の「夜行念佛（夜念佛）」碑から江戸期には始まっていた行事と見ることができる。かつては、山形市内各地、山形市外からも夜行念佛講が集まっていたが、現在は山寺地区の山寺夜行念佛保存会と天童市高擣地区の高擣夜行念佛講の2団体のみとなっている。

夜行念佛実施時の服装は、浴衣に袴を着用し、その上に「オユズリ」と呼ばれる木綿の衣装を着用する。オユズリは講（保存会）に加入し3年を経てから着用を許される。足元は足袋に草履を履く。頭には一字笠をかぶり、手には金剛杖を持つ。加入して3年未満の者の笠には紙垂をつける。杖先は紙で包み、歩く際は杖を地面につかないように注意し、立って唱える時は足の甲に杖を乗せる。

行事の行程は、「笠かぶり」儀式を行ってから出発し、門前町の要望のあった店舗の前で「喰物一切」を唱える。その後、大日堂、立石寺根本中堂、念佛堂、姥堂、仁王門、性相院、金乘院、中性院、華藏院と回り、奥の院、奥の院大仏殿に至り、初日の行程を終える。高擣夜行念佛講はここで終了し下山するが、山寺夜行念佛保存会は一泊して翌日へと続く。翌朝は、多聖場、開山堂、磐司祠、常願寺跡（五大堂から遙拝）、立石寺本坊、滝不動と回って終了する。後日、「笠はずし」の行事と直会を行って、その年の夜行念佛の行事を終わりとする。

磐司祭のシシ踊り

磐司祭は、立石寺にシシ踊りを奉納する祭りで、元は旧暦7月7日に行われ、現在は新暦8月7日に近い日曜日に行われている。

立石寺の開山伝説に、貞觀2年（860）、山寺を狩猟場としていた猟師の磐司磐三郎が、立石寺を開山しようとする天台宗の僧円仁との対面を経て、その

地での狩りを止めたというものがある。その時に鹿や猪などの鳥獣がこれを喜び感謝して踊り、それを由来とするのが山寺に奉納されるシシ踊りである。

磐司祭に奉納されるシシ踊りは近隣の地域から来山し、その数20組を超えることもあったという。それらは、山形市平石水に伝わる鹿楽招旭踊、円仁が鹿に案内されて長瀬に至ったという由来が伝わる東根市の長瀬猪子踊、シシ達が立石寺開山に協力して斧で木を伐り倒したという伝承をもつ大江町の深沢獅子踊、天童市の高嶺聖靈菩提獅子踊、東根市の沢渡獅子舞、寒河江市の旭一流内楯獅子踊、村山市の稻下鹿子踊、中山町の土橋獅子踊などである。これらシシ踊りのシシ頭は、獅子ではなく、地元で青鹿と呼ばれるカモシカや猪・鹿である。こうしたシシ踊りが江戸時代以来、先祖供養・靈魂供養のため、磐司祭の時に踊られてきたのである。

山寺石切踊り唄

山寺の凝灰岩は建設資材に利用するために採石され、それは明治20年代に最盛期を迎えた。その採石には発破（火薬）が使われたが、その発破もみ作業（鉄棒を使って火薬をつめる穴を掘る）の唄として明治15～40年の間頃に作られ歌われるようになったのが山寺石切踊り唄。戦後、山寺婦人会によって振り付けがされ、唄と共に木槌と鑿を用いた踊りも踊られるようになったもの。昭和45年に民謡会から派生した山寺民俗芸能保存会が結成され当踊りを継承したが、同会は平成28年に散会、現在は山寺小中学校で継承して文化祭の中で披露されている。

参考文献

菊地和博『シシ踊り　—鎮魂供養の民俗—』岩田書院 2012

山岳寺院立石寺創建の考察 - 貞觀二年（860）が意味するもの -

山形県 長瀬一男

天台宗の宝珠山立石寺は、平安時代初期に創建された山岳寺院である。立石寺は、山形県の中央東側、靈山信仰と水分信仰の雨呼山の南山麓に位置する。

「立石寺は、貞觀二年（860）、清和天皇の勅願所として、僧円仁によって創建された」といわれる。これは、貞觀二年一二月三〇日付けで円仁が注進した立石寺所蔵の「円仁注進状」（土地調査の具申書＝課税台帳）が、典拠になっている。

この立石寺創建説には、つぎの疑問がある。(1)貞觀二年に、清和天皇は11歳。11歳の幼帝が自らの意思で、立石寺創建の勅命をだせるか。(2)僧円仁は、貞觀二年に67歳の高齢。しかも、第三世天台座主として、公務多忙で、出羽国に巡錫できたか。(3)北上する天台宗の教線の観点から、貞觀二年の創建は不自然。(4)「円仁注進状」には創建の記述がなく、出羽国巡錫の必然性や記録もない。

800年代、国家は、天台宗の「王法仏法相依」という政教一致論により、天台宗を国家仏教の第一に指定し、仏教の力で東北地方を統治しようとした。天台宗の教線は、時間を追って北上した。830年頃には、立石寺、松島寺のラインまで到る。850年には、中尊寺。毛通寺、象潟蚶満寺ラインに到り、860年には、最果てを護る寺院として、天台寺が整備された。

「貞觀二年」は何を意味するのか。貞觀二年に、清和天皇の実の祖父である藤原北家の良房は、摂政として、全権力を手中にして権力の絶頂期にあった。良房の妻は、嵯峨天皇の皇女潔姫。仁明帝の妃順子は、良房の妹。文徳帝の妃明子は、良房の娘。明子の子は清和天皇である。

貞觀元年に、56歳の良房は、清和天皇に「五畿七道」に命じて堂塔を修理の勅命をださせた。翌貞觀二年に(1)諸国の境内僧尼に対し鎮護國家の「仏頂尊勝陀羅尼」の誦経の勅命と、(2)舞楽などにより人心に秩序と調和をもたらす釈典式の勅命をださせた。この二つの勅命が貞觀二年の記憶になったと考えられる。

では、立石寺の創建は、いつか。三千院本の「慈覺大師伝」によると、天長六年（829）に陸奥・出羽国で病魔が広まり、その救済のため36歳の僧円仁は四天王寺の講師をやめ、出羽国にむかった。旅の途中、天長七年（830）一月三日、出羽国大地震がおきた。円仁は、病魔退散と罹災救済、死者の追福のために、帰京する翌年まで、原立石寺を創建した。その場所は、国家政策で移住した、円仁と同郷の人々が住む千手院地区の峯の浦であろう。

立石寺円海について

大正大学文学部歴史学科 中川仁喜

円海（?-1634）は織豊から江戸初期にかけて活躍した立石寺の僧侶である。円海の功績として知られているのは、大永元年（1521）戦禍により破滅した立石寺が最上義守によって再興された際に、比叡山延暦寺根本中堂から燈火を申し受け、如法堂に古例の法式を復活した事である。更に元亀2年（1571）の法難によって焼失した延暦寺根本中堂が天正17年（1589）再興された時に、立石寺から比叡山まで燈火を移した人物でもある。この様に円海は、結果的に戦禍から不滅の燈明を護り、再興を果たす立石寺と延暦寺双方に燈明を伝えるという偉業を成し遂げた人物として知られている。

しかし円海は立石寺のみならず、南光坊天海のもとで日光山の経営や幕閣とのやりとりに関与した人物でもある。報告者は近世初期の天台僧天海を研究対象としており、さらに弟子、及び周辺で活躍した僧侶をも分析している。その研究過程で、天海の意思を奉じて実務を担当した僧侶を報告者は奉者と呼んでいるが、円海もまた天海が頼りとした奉者の一人であった可能性を指摘したい。

円海と天海が面識を持ったのがいつであるかは判然としない。天正年間の比叡山延暦寺再興時に天海は故郷である奥州会津の黒川稻荷堂、そして蘆名家が伊達政宗によって摺上原の戦いで没落した後は常陸国不動院を中心に活動している。不動院時代に天台座主妙法院常胤より助成を求められてはいるが、この再興時に主体的に関与した形跡は認められない。円海についても、天正17年の比叡山根本中堂常燈明移燈のほか、再興に関与した史料は管見の限り見られないでのある。しかし慶長19年（1614）には円海が日光山の算用を天雄とともに執行しており、その頃にはすでに天海の奉者として活動していたようである。その法縁をもってであろうか、円海は日光山の子院である護光院の開基となっている。円海は、寛永11年（1634）に遷化したようである。その活動時期前後にも円海と名乗る僧が見られるが、同名異人と思われ研究上注意を要する。

また、円海は学僧としても少なからず足跡を残しており、これが天海に重用された理由の一つとして挙げられる。天海は奉者に様々な地域や出自の僧侶を用いたが、それらに共通する部分として学僧である事が挙げられる。まだ研究途上であるが、天海は政治的感性もさりながら、なにより天台宗を学問で牽引する人物を重用していると考えられ、円海もその一人であったと推測できる。

立石寺史の画期とその意義

立正大学 時枝 務

本発表は、山形市立石寺の歴史の画期を考古資料によって明確にし、その画期が靈場としての立石寺の展開のうえでどのような意義をもつのかを論じるものである。

立石寺史の画期については、すでに山口博之による試論が提示されており、それは次のようなものである（山口博之『中世奥羽の墓と靈場』2017）。「1期：露岩に対する自然信仰を天台宗が獲得した段階（九～十世紀段階）」、「2期：慈覚大師の入定伝承が形成された段階（十一～十三世紀）」、「3期：寺僧の墓地が形成された段階（十三～十四世紀）」、「4期：庶民層の納骨の開始段階（十五～十六世紀）」。全体の流れとしては首肯される時期区分ではあるが、区分の指標が一定せず、画期の根拠となる具体的な史料・資料が明確でないという問題がある。また、17世紀以後が捨象されていることも、不十分の謗りを免れないであろう。

なかでも問題なのは、天養元年（1144）の如法経碑が十分に評価されておらず、画期として認定されていないことである。本発表では、如法経碑が靈場形成に果たした意義をあきらかにすることで、12世紀中葉に画期があることを明確にし、それ以後に靈場としての立石寺の発展があったことを主張したい。そのことは、靈場とはなにかをあきらかにすることに通じ、立石寺の歴史全体の理解に大きな影響を及ぼす。

山口が曖昧にした12世紀の画期を正しく評価することで、13世紀以降の歴史に対する理解も修正を余儀なくされることはいうまでもなく、立石寺の如法経信仰や納骨信仰があらためて注目されることは贅言を要しない。

本発表では、如法経信仰の具体的な顕現である経塚を取り上げ、立石寺における経塚の問題を論じる。また、納骨信仰の前提となる死者供養の実態について金石文を手がかりに解明し、靈場立石寺の展開を立体的に解明したい。

おもに考古資料を素材とした議論に終始するかもしれないが、目的は靈場とはなにかを少しでもあきらかにすることにあることを、あえて強調しておきたい。

東叡大山羽黒三山学頭檀那院胤海の生涯

高勝寺プロジェクト 林 京子

南光坊天海は従来の山王神道に対し〈東照権現〉という新しい神を創造し、比叡山に対して東叡山寛永寺を創出したが、寛永20年にその生涯を終えた。寛永寺は天海の死後も発展を続け、守澄法親王を門主に迎えて天台宗の本山として伯耆大山や羽黒山等の著名な靈山を多く傘下に置き、日本の宗教界の頂点に立った。それには天海の顕彰と彼の構想の実現に挺身した弟子たちの存在が不可欠であった。

胤海（1613～1689）は天海の最晩年の弟子である。彼は徳川家康の側近、施薬院宗伯の子で天海や豪円と協力して比叡山の復興に尽力した豊臣秀吉の側近施薬院宗全の孫であり、天海の後継者公海は6歳上の義理の従弟にあたる。胤海の生涯については従来『東叡山寛永寺子院現住法脈記』等の断片的な記録を集めるしかなかったが、昨年『続天台宗全書』史傳3が刊行され、彼の生涯の詳細が漸く明らかになった。

胤海の業績は、伯耆大山学頭として二度の火災からの大山寺の復興と自らの権益を捨てた持続可能な体制の構築、寛永寺学頭院である凌雲院の修理費用の公費化、羽黒山執行別当として羽黒山における寛永寺による支配体制の完成、『両大師縁起』の作成による天海の顕彰と既存の雑多な信仰の寛永寺への取り込み、さらにそれらのメディアミックスによる普及等、多岐に亘る。学僧としても天海が再興した比叡山の堅義会等を振興し、教学の場として整備した。その一方で胤海は65歳を過ぎて羽黒山の峰入りも完遂した。仏教以外にも神道や儒教、医術や老荘思想にも造詣が深く、將軍や幕閣、朝廷の要人とも安定した信頼関係を構築し、寛永寺の圧倒的な宗教権威創出の下支えを行った。

本発表では昨年度の発表に引き続き胤海の波乱の生涯を辿り、行政官として、宗教者として、学者として生きた胤海の人となり、隠棲した薬樹院や彼の墓、歌人というもう一つの彼の顔を紹介する。

比叡山東谷尾の薬樹院墓所の胤海の墓には「東叡大山羽黒三山學頭前檀那院贈大僧正法印大和尚位」と刻まれている。この長い称号には、77年の生涯を全力疾走した胤海に対する人々の深い敬意が込められている。「余嘗自幼侍師之座下、而無日不相追随、恰如形影之相從」と述べる程天海の思想の正嫡であるという強烈な自負に貫かれた胤海の生涯は、優れた研究者や機関によってさらに研究されるべきで、本発表はその一助となることを願うものである。

西川須賀雄の初期思想

佐賀県 三ツ松誠

西川須賀雄は小城藩の神職出身の復古神道家であり、出羽三山の神仏分離や不二道の教派神道化に関係したことで古くから知られている。他方、こうした目立った活動の前後に彼がいかなる活動を行っていたのか、といった問題については、論じられることが稀である。この問題をめぐる研究の一環として、幕末期の彼について取り上げるのが、本報告の目的である。

彼は、教派神道実行教を立ち上げた柴田花守の出身地小城における弟子であったほか、佐賀本藩において尊王攘夷派の学者、枝吉神陽などから指導を受け、神職向け教育機関である神学寮に関係していたことが、近年明らかになっている。そして他の少なからぬ神学寮関係者と同様に、上京し、向日社の六人部是香の許で修学して平田国学の影響を受けていた。

本報告では、こうした幕末期の彼の思想形成過程を確認した上で、この時期の著作の内容を紹介する。具体的には『國の真柱』(安政3年(1856)序、元治2年(1865)刊)と『幽顯君父図』および「上幽顯君父図説啓」(元治元年(1864))である。

前者は柴田花守の教えをまとめたという形式で著された天地開闢をめぐる図解であり、後者は孝明天皇に上呈されたと称される図および付記である。いずれも真淵や宣長、篤胤らを称え、幽界と顯界の二つから成るものとして世界を説明する点、平田門流らしい作品である。皇國の世界的卓越性を主張する際に西洋医学書や水戸学の議論を利用している部分を看取できる点も同様である。

しかし、後者が氣吹舎の『顯幽分属図』を単純化して天皇を中心とした祭政一致を説くものに見えるのに対し、前者は、天地開闢後早い時期に成立した造化三神=參神の所在を富士山に比定して、『三大考』『靈能真柱』的議論の文脈に、不二道の教義を付会する役割を果たす著作と評価できる。元治年間段階の須賀雄は、皇國の至尊と万教一致・顯幽分界を説く平田国学の影響を受けつつ、不二道的著作と、不二道的要素の無い著作の両方を世に広めていた。こうした、平田神学を軸に据えつつ、関わった信仰組織固有の在り方に応じた神学をも打ち出す彼の姿勢は、後の時期にも認めうるものなのかもしれない。

出羽三山の比定と本地仏 一鳥海山を中心に一

北方風土社中 神宮 澤

出羽三山という呼称は最近の研究では江戸期に用例があるが（岩鼻通明『出羽三山』岩波新書2017）、羽黒山内では江戸時代を通じて「羽黒三山」、関東衆は「奥の三山」、岩手の南部では「最上の三山」と呼び、明治後は「羽前の三山」とも呼ばれたという（戸川安章2005、初出1980）。

出羽三山は固定が羽黒山と月山、出入りが鳥海山、葉山、湯殿山であるが、鳥海山が含まれるか否かなど所説紛々である。戸川（前述）は最上氏の台頭による葉山の退列で鳥海山の加列が画策されたが、山岳修行が広大な庄内平野で中断する故にうまく行かず、通史的に鳥海山を三山に入れないと発表者はこれに納得する。

他方、岩鼻通明2003は『羽黒山伝』『大泉庄三権現縁起』により鳥海山の列中を指摘、伊藤清郎2005は中近世移行期の新三山形成の一時期に列中かとする。政次浩2006は近世前に望見の方向により葉山又は鳥海山が同時代に列中にあった、三山は四名山の総称とし、宮家準2012は古代に鳥海山、葉山が同時代に列中にあったとする。鈴木正崇2015は『拾塊集』『羽黒山縁起』から室町時代に葉山・月山・羽黒山を三山、湯殿山を総奥院としつつ、前述『三権現縁起』によって鳥海山の三山列中の説ありとする。しかしながら『三権現縁起』のいう三権現が後代の出羽三山と同義としてよいか慎重を要し、その他の典拠は近世作の疑いが強い。よって鳥海山の三山列中の確証とはならない。

ただし蕨岡・滝沢・矢島・小滝等の修験者、遅れて吹浦の神宮寺衆徒までが羽黒山末であったとすれば（前述戸川）、これら鳥海山の修験者が羽黒山の峰入りに参加し、所定の資格・補任にあづかったと推認される（ただし神宮寺衆徒の修験者性については別考を要す）。よって鳥海山は相互入峰の山ではないが、事実上、三山の一と自称したか他称された可能性までは否定できない。なお江戸後期に羽黒三山執行別当職が存するが、少なくとも鳥海山を統括する役職ではない。

本地仏は鳥海山・葉山が薬師如来、羽黒山が（聖）観音菩薩、月山が阿弥陀如来、湯殿山が大日如来とほぼ異論はないが、その成立には諸説がある。鳥海山では、承和11年（844）比叡山僧安慧の出羽国講師派遣を契機に創建されたと推察する神宮寺に法華一乘の本尊として薬師如来が据えられ、以降大物忌神の本地にされたと按する。出羽三山の枠組みから薬師が成立したわけではない。委細は小論「鳥海山の本地仏と諸仏信仰」『日本宗教文化史研究』38、2015。

近代の東北地方太平洋沿岸地域におけるお山参り

帝京大学文学部史学科 吉野（筒井）裕

山形県庄内地方には北に鳥海山、南に出羽三山・金峰山などの靈山が存在しており、これらは現在に至るまでの長きにわたって人々の信仰をあつめてきた。本研究は、近代に東北地方太平洋側の人々—岩手・宮城県の人々—がどのように庄内地方の靈山に参拝していたか、また、これを成立させた要因とは何かについて、山岳信仰の神社・修驗者・参拝者の記録の分析、ならびに、現地調査の成果をもとに解明を試みるものである。調査の結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 明治初期の段階で、鳥海山を祀る大物忌神社は山形県庄内地方南部や、秋田・岩手・宮城県在住の神職・修驗者の末裔—すなわち「遠方の宗教者」—とのネットワークを構築すべく、彼らに称号・感状の授与や経済的便宜を図るなどの工夫を行い、参拝意欲を刺激し続けた。これにより、明治期から昭和初期にかけての期間、遠方の宗教者たちは同社との関係を維持し、定期的に鳥海山参りをするようになった。鉄道が発達すると、彼らの参拝活動はより盛んになったといわれている。なお、近代に、宮城県本吉郡の信者たちは7月下旬頃に、岩手県稗貫郡・和賀郡・東磐井郡・西磐井郡・胆沢郡と宮城県登米郡の人々は7月下旬から8月上・中旬にかけて、さらに宮城県名取郡・牡鹿郡の信者は8月下旬に鳥海山参りをしていた。この「時間差」は彼らの生業と生産暦の相違によるものだと考えられる。
- 2) 近世期に南部藩の人々は、鳥海山と出羽三山の両者に参拝する「最上参り」を行っていた。明治期に、最上参りをする人々の一部は秋田県南部を経由して鳥海山に入り、その後、善宝寺・出羽三山・立石寺・瑞巖寺・金華山などへ向かった。さらに、これらへの参拝の前後に酒田・鶴岡・山形・仙台で都市観光を堪能した。したがって、当時の最上参りは東北地方太平洋沿岸（南三陸）と日本海沿岸を結合し、その間に修行・都市観光的要素を相互に組み込むという構成を呈していくことになる。当時の秋田県南部は都市観光的要素に乏しい地域であったがゆえに、最上参りの人々は同地域を「精進落としの場」として適切ではないと考え、反時計回りの経路を採用したものと推測される。また18世紀後半に、鳥海修驗の一部（蕨岡衆徒）が現在の秋田県南部を檀那場として支配下においていた点も、最上参りの人々に同地域を通過させる素地のひとつになったと考えられる。

庄内天保三方国替えにおける鳥海山大物忌神社の関わり

埼玉県 花井 紀子

天保十一年（一八四〇）十一月一日庄内藩に幕府からの申し渡しがあった。三方の領知替えである。庄内藩主酒井忠器は越後・長岡へ、長岡藩主牧野忠雄を武蔵・川越へ、そして川越藩主である松平斉典を庄内へと移封とのこと。酒井家の長岡への領知替えの理由は定かでなく、酒井忠器の言動が大変不謹慎であったとか、川越藩松平家は非常に貧乏なので豊かな庄内藩を欲しがったとか、まことしやかな噂が広がっていった。

噂が広まる様子が庄内から遠く離れた江戸でも話題になっており、九段坂下に住んでいた旗本夫人である「井関隆子」は自身の日記にこの騒動の顛末が書かれていることからも伺える。

平成三十一年二月致道博物館企画展「歴史の扉～江戸時代の訴訟」ではこの領知替え阻止運動としての「駕籠訴について」の展示も行われた。この領知替えに関わる史料として、次の史料の展示があった。

領知替えの阻止運動の様子が絵巻物で仕立てられた「夢の浮橋」。

「合浦珠」転封中止八年後にまとめられた記録であり、全五六巻に当時作成された文書が写しとれていることから詳細な当時の情報が残されて大変貴重な記録である。

また掛け軸として「於酒田大浜大護摩執行図」の展示もあった。

領知替え阻止運動で中心人物となった玉龍寺（遊佐町）の文隣和尚をはじめ、多くの宗教者・団体が関わっていることがこれらの史料から読み取ることができる。展示のあった掛け軸からも酒田大浜で大寄の様子が描かれるなか鳥海山山頂近くでの蕨岡修験の護摩執行の様子が描かれており、多くの修験者がこの運動に関わっていたことが見られる。

これらの史料をもとに、江戸の末期の鳥海山大物忌神社蕨岡修験を中心にこの国替えに修験者がどう関わっていったかを探りたい。

天草下島 帽子岳における民間信仰

開新高校 大田黒 司

1. 導入

天草の地形は多くの地塊で構成され、断層も多く、島嶼地域であるが自然環境的には山であり、多くの地域に山村との類似の民俗性が見られる。これまで筆者は下島の東海岸(産島)に修験道を意識した民間信仰が存在し、西海岸ではキリスト教を起源とする民間信仰の一部に修験道との近接性が見られる可能性を指摘した。天草では高度に体系化された修験道は確認されないものの、身近な山を神聖視する地域社会単位の信仰が存在しており、修験道との関連性や類似性も多く、本研究はその一例として帽子岳の信仰を紹介する。

2. 地域概観

帽子岳は旧食場村と旧櫛宇土村の境界に位置し、標高483m程度である。標高は低いものの、天草一の名山とされ、かつては多くの人が登拝した。山頂近くに帽子岳神社と書かれた鳥居があるものの、山頂に石像物群があるだけで社殿等はない。

3. 信仰の概要

山頂には梵字が彫られた熊野三所大権現の碑や不動明王の石仏、帽子大権現の小祠があり、神仏習合の様相を呈している。祠には石製の神像が安置されており、帽子や頭巾、海水や海砂、サンゴ等を奉納する風習があり、海のものを奉納する風習は、天草上島の倉岳にもみられる。山頂の砂はアリ除けの御利益があるとされ、使用した時は海砂を奉納することになっている。また麓の鳥居から山頂までの登山道には稻荷社や石仏があり、信仰空間が形成されていた。旧食場村の各集落が輪番で管理しており、旧暦2月16日(現在3月第2日曜)が祭日である。旧櫛宇土村側からも信仰されており、石造物の奉納数は同程度である。

4. まとめ

帽子岳の信仰は海のものを山頂に奉納する点に特徴がある。前述の産島と比較した場合、山頂等の空間が神聖視される点、石造物群がある点、その一方で靈魂や禁忌に関する伝承がない点に共通がある。天草は地形的に巨岩や磐座が多く、島嶼であるためランドマーク的な山や島も多い。そのため自然環境にヌミノーゼ性が多く、山中や丘の至る所に小祠などが祀られており、タカガミ様と一括して呼ばれているほど、それらは無数にある。帽子岳もその一例であるが、ここでは熊野三所権現が祀られ、熊野信仰との関連を指摘できる点に特徴がある。

5. 展望

今後の課題は、海水等を奉納する点などが屋久島の岳参り等と類似しており、航路等も踏まえ、ヤマアテ等の観点も加えつつ、より広域に、海における山岳信仰(修験道)を意識しつつ、天草全体の民間信仰を解明していく必要がある。

加賀山代温泉「菖蒲湯祭」と修験者らの関わり

法政大学大学院(修士課程) 白田依里佳

年中行事「端午の節句」に関する習俗の一つに菖蒲湯がある。植物の菖蒲に含まれる薬効とともに、その特有の香りと剣状の形から辟邪の力があるとされ、湯に入れ浴し、無病息災を祈願する意味合いをもち、古くより行われてきた。現代日本においても、地域差はあるものの、菖蒲湯は一部の温泉や銭湯、また家庭において実施されている。

石川県加賀市を中心に所在する加賀温泉郷では、月遅れの端午に「菖蒲湯まつり」が実施される。各地の温泉守護寺社において菖蒲にまつわる祈願等が行われた後、共同浴場の「総湯」や各旅館に菖蒲を浮かべることが主な内容となっている。ここで、加賀温泉郷の一つである山代温泉の「菖蒲湯祭」に注目すると、他温泉地域とは異なり、修験者らが関わる祭祀的な展開がみられる。山代温泉の温泉守護寺院である薬王院温泉寺と、共同浴場の総湯および古総湯のある「湯の曲輪」を中心に行われ、地元の青年団「山代俱楽部」と薬王院温泉寺の住職や修験者を中心に複数の儀式が行われる。起源も同寺院にあり、平安時代に白山を崇拝する修験者が集まる筆頭寺院であった薬王院温泉寺では、旧暦の端午の時期に、厄年の若者に関する厄払いに加え、一年の無病息災の祈願を込め、菖蒲を俵に詰めそれを湯に投げ入れるとともに浴したと伝承される。また、江戸時代には、山代温泉へ湯治に来訪する大名等権力者の行列を修験者が守護する役割をもっていたとされ、その様子が儀式の一部として取り入れられてきた。

大正時代にはこれらの形式が整えられ、修験者が菖蒲を俵に詰め、湯に入れ浴していた儀式は6月4日に「入湯式」として今日まで実施されている。また、入湯式の安全無事や成功を祈願する「入湯式祈願祭」では、薬王院温泉寺の境内において柴灯護摩がとり行われる。また、入湯式以外にも神輿巡業が開始される前には、加持祈祷の儀式が行われる等、他温泉地域にはみられない宗教的因素が加わる。

現代日本の菖蒲湯に関するものは、管見の限り加賀温泉郷の他に一部の報告がみられるのみであり、さらに、修験者が関わる事例は見当たらない。そこで、修験者ら宗教者の役割および関わりに注目しながら、儀式の内容と式次第、目的や意味合い、祭の特徴などを明らかにするべく、2018年と2019年の二回にわたり祭を観察し、現地での資料収集、聞き取り調査等を実施した。

伊勢の修験系富士講 一伊勢参詣曼荼羅のなかの富士一

奈良教育大学非常勤講師 萩野裕子

富士山南西麓の本宮浅間社社人や興法寺の富士村山修験者などが広めたとみられる、修験系の富士信仰が伝承されている。その伝承が根強い伊勢の富士講の富士参詣習俗を、次に報告した（科研報告書『17～19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容』（研究代表山形隆司））。

本発表では、これら伊勢の修験系富士講を歴史民俗学的に考えるために、その形成期について検討する。資料は、本宮浅間社社人の道者帳①「永正九年之古帳写 八木御炊官」（永禄年間か）と②「慶長十七年 導者付帳 鈴木甚左衛門」、富士山南西（村山口）登拝道の室についての③「富士山室小屋建立古帳面写」。

①で道者が確認される地名のうち、伊勢両宮周辺5例（宇治など）、伊勢湾沿岸（答志島含む）7例、伊勢参宮街道付近など2例。②では慶長17年から元和9年まで繰り返し参詣が記録され、先達らしい名もあり、17世紀初頭には富士講が形成とみられる。そのうち、伊勢両宮周辺4例、伊勢湾沿岸5例である。③から、村山口登拝道で伊勢の建立者による室は、すべて寛文年間再建で「講屋」が記され、17世紀後半には講が明確に確認される。この③で建立者である「先達」などの所在は、伊勢湾沿岸2例（大湊・二見）、東海道・参宮街道付近7例（石薬師など）である。

以上から、伊勢での富士講は、とくに伊勢湾沿岸の海上交通、そして東海道・伊勢参宮街道の陸上交通の至便な地域に、早期に形成されたとみられる。現時点で伊勢の富士「講」の初見は、沿岸の二見松下の慶安5年（1652）の資料。また、以上の多くは中近世に神宮領である。

次に、②に「六大夫」③に「宮大夫」など、先達の「大夫」名に注目したい。彼らは伊勢御師の可能性があろう。早期の富士講が、両宮周辺や沿岸で確認される点からも、伊勢での富士講の形成には、伊勢から東国や周辺への海上交通を可能にしていた、伊勢神宮の下級神人や伊勢御師が関わっていないか。そして、②の「三郎大夫」や③の先達「宮大夫」には、村山修験大鏡坊から先達所の許状があり、彼らは修験者だったか、修験的性格を持っていたと考えられる。

3本の伊勢参詣曼荼羅に、伊勢両宮・朝熊山・その海上に富士が描かれる。西山克氏は、富士浅間信仰との結びつきを推測した。同図に描かれた多くの山伏が、早期の富士講先達だった可能性はないか。

伊勢の修験系富士講の分布や習俗の背景に、海上交通や伊勢御師などの関わりを注意したい。

西宮神社の雨乞いと六甲山の石宝殿

西宮市立郷土資料館 早栗佐知子

西宮神社の境内には、菊理媛命を祀る六甲山神社がある。これは、六甲最高峰のやや東にある西宮神社境外末社を寛政元年（1789）に境内へ遷したものである。

山上の六甲山神社は石宝殿（いしのほうでん）とも呼ばれ、兵庫県神戸市・西宮市・伊丹市などには「旱魃のときには石宝殿へ雨乞いに行った」との伝承が残る。それらの地域では、石宝殿を「ドショノボウ（道聖坊とも表記）」とも呼んだ。

「西宮神社御社用日記」には、西宮神社が依頼を受けた雨乞いの記述が幾つもみえる。翻刻・刊行済みの元禄7年（1694）正月から享保12年（1727）の記録にある雨乞い記事を要約して数例あげると、次のようになる。

元禄13年（1700）6月25日一三ヶ村が広田御社へ祈雨を依頼、27日朝に祈雨。

享保8年（1723）7月11日一河内國讚良郡深野村北新田の百姓らが六甲山へ旱魃のために招雨の登山。御神前で神職の祈雨。

同年7月20日一河内北新田の天王寺や宇兵衛らが早速に大雨が降った御礼に六甲山へ登り当社へも参詣。

享保9年（1724）6月10日一河内さゝら郡北條村より請雨願に六甲山に登った。四日のうちの雨を願った。

同年6月17日一河内さゝら郡北條村百姓らが雨乞に六甲山に登った。17日より19日まで宮内が宮籠り、一日二三度の祈雨。18日・19日の両日に降雨、大水。

以上のように、西宮神社への祈雨の依頼は多く、これをみる限り高確率で雨をもたらせている。そして、神社での祈雨から山上での祈雨に変化している様子がみうけられる。

ところで、大阪府豊中市山ノ上町にある白山咩神社土砂之坊の祠について地元では「ここは、もともと六甲山にあった社の分社が存在した」という。さらに「明治の初め頃、この祠の前で雨乞いをしたら、9月9日に雨が降ったことから今も“雨乞いの祭り”を9月9日に近い日にしている。」というので、六甲山神社・石宝殿から豊中市山ノ上町へ分社した白山咩神社土砂之坊では、明治初めに雨乞いの靈験があったことがわかる。それは、六甲山から遠く離れた大阪府豊中市のことである。

六甲山中および山麓には西宮神社を介さない祈雨があったことが推測できるが、同時にそれを広める活動があったことがうかがえる。

今回は、六甲山の山頂近くにある「石宝殿」への信仰形態をみることで、六甲山周辺の信仰の諸相を探っていきたい。

役行者箕面寺開創伝承の成立について

御影史学研究会 篓 元晶

箕面は、役行者が開創したことで有名である。そのことがくわしく書かれたもので最も古いものが、『伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集』の「箕面寺縁起」である。同縁起集の「當麻寺流記」の末尾には寛喜三年十一月十日に慶政が記した識語があり、そこには「箕面寺縁起云」として内容が引用されており、その年次や文言が「箕面寺縁起」の記述と合致している。そのことから、「箕面寺縁起」が少なくとも寛喜三年（1231）までには成立していたことは明らかである。

その概略を記すと、役行者が夢の中で箕面の滝の竜穴を行くと城があり石門があったという。呪を誦していると、徳善大王が現れ、ここは南天竺の竜樹菩薩の淨刹であると述べ扉を開けて中へと導いてくれた。すると、中央の宮殿の中には竜樹菩薩と弁才天女が座っていた。その前で、徳善大王が灌頂を行い頭をなでて信仰心を強く持って努力するようにと述べた。それで、夢が覚めると、滝の下に草庵を構えて等身の竜樹菩薩と弁才天女の像を安置した。そして、開眼供養を行い、箕面寺と号したという。以上のように、鎌倉時代初期の箕面では、役行者による箕面寺の開創伝承が成立していた。

鎌倉時代の成立とされる『願文集』に記載されている治承三年（1179）の「箕面寺常行堂供養願文」には、初めに「役優婆塞。酌修行之濫觴。徳善大王。爲鎮守之靈社。」とあり、これが箕面寺大衆の名前で出されている。役行者が箕面の開創者であることを述べたものであることから、大衆の中で修驗者集団が大きな力を持つようになっていたことが推察される。また、並んで徳善大王の名があがっていることから、彼らが徳善大王を祀る集団であったのではないかと考えられる。そのため、「箕面寺縁起」の中で、徳善大王が役行者を招き入れたり灌頂を行ったりという重要な役割を果たした人物として語られたものと思われる。

後の記録ではあるが、『民経記』天福元年（1233）二月三日条には、御師の円仏房の宿坊に泊まり、先達の案内で箕面の滝を巡り竜樹菩薩や鎮守に奉幣をした様子が記されている。このような修驗者の活発な活動が、箕面の発展に大きく寄与したものと思われ、それにともなって箕面寺内での彼らの発言力も高まつていったものと考えられるのである。

いわゆる「女人高野」の起源と諸類型

信州大学特任教授 牛山佳幸

「女人高野」とは、一般に女人禁制の高野山に対して女性の参詣を容認した僧寺のことで、いわば女人救済の一形態と言ってよい。代表的な例は大和室生寺だが、この寺の場合を含め、「女人高野」という表現は江戸時代以降の史料に見えるもので、その故か従来、室生寺が女性参詣者を受け容れたのは、真言宗寺院として独立し、桂昌院の帰依を得た元禄期以降とする見方が多かった。こうした通説に疑義を呈し、同寺の実態としての「女人高野」は中世に遡りうることを明らかにしたのがシェリー・ファウラー氏で、最古の事例として宝徳2年（1450）の不断光院比丘尼衆の参詣（『経覚私要抄』）を上げている。氏の研究視点は重要で、それより古い鎌倉期の例では、龜山院愛妾の讃岐二品の参詣（『後宇多院御幸記』）を上げうるが、起源はさらに平安初期まで遡るとみられる。というのも、律令制下には僧寺は女人禁制、尼寺は男子禁制の厳守が求められたが（「僧尼令」）、官僧官尼体制の崩壊と貴族女性の物詣での流行に伴う規制緩和により、9世紀初頭に僧寺での女人参籠が条件付きで容認され、10世紀以降には大和長谷寺や近江石山寺などの畿内近国の僧寺で、それが常態化する経緯が知られるからである。

それでは、古くから女性が参詣できた室生寺が、何故に江戸期になって態々「女人高野」を唱えたのか。この点が第二の課題だが、江戸期の室生寺は地理的にみると、山中ながら畿内からの伊勢参宮路であった初瀬街道と伊勢本街道に挟まれ、両道から立ち寄り可能な場所に立地していた。江戸期に「女人高野」を称した僧寺は管見では10ヶ寺ほどあるが、この視点に立つと、たとえば紀伊慈尊院が紀ノ川の船着場と町石道の起点に位置したのを始め、河内金剛寺が高野街道、伊勢の丹生神宮寺が和歌山別街道、東国では常陸仏国寺が水戸からの日光道といったように、いずれも当時の重要な交通路沿いに所在したことが判明する。すなわち、江戸中期以降に庶民による伊勢参宮、高野詣で、西国巡礼といった寺社参詣の旅が隆盛したことで、沿線の寺院の中には往来する参詣者の獲得に乗り出すところも現れたが、とりわけ女性を誘引するには「女人高野」を唱えることが有効手段であったのである。そのために女人救済説話を創作するなど、様々な理由付けをして喧伝したが、摂津神呪寺の如意尼出家譚や切利天上寺の摩耶夫人伝説などはそうした例と言えるものである。

山寺夜行念佛習俗の概要

平成 11 年 12 月文化庁記録を講すべき無形文化財選択

平成 13 年 3 月山形市指定民俗文化財、天童市指定民俗文化財

山寺夜行念佛の習俗は、8 月 6 日夜から 7 日朝にかけて、山形市立石寺山内で行われる。

立石寺は慈覚大師円仁の開山と伝えられ、夜行念佛も由来によれば慈覚大師円仁が中国から伝えた声明の流れを汲み、空也上人によって広められたと伝えられている。

現在、夜行念佛は、地元の山寺地区の山寺夜行念佛保存会と、天童市の高擣夜行念佛講が伝承しているのみである。高擣夜行念佛講は、川東総取締と呼ばれ、この講が奥の院に向かって登り出さないうちは他の講中は登り始めてならないという。現在、奥の院で夜を明かすのは山寺夜行念佛保存会だけで、高擣夜行念佛講は奥の院で念佛をすませると山を下りる。高擣夜行念佛講では講中めぐりとして各家の仏前で盆供養も行っている。

この夜行念佛は、かつては村山盆地一帯で盛んに行われており、現存する夜念佛供養塔の造立銘などから、明治時代までは庄内地方や秋田県境の遊佐町周辺でも盆の行事として行われていたことが知られている。

高擣講中は高擣安樂寺で出で立ちをして、宿で休憩、立石寺根本中堂に念佛をあげた後、本坊、山門から奥の院に向かって出発し、姥堂、仁王門、山上の四塔頭、そして奥の院、多聖場（塔婆供養所）大仏殿の順に巡って念佛を唱える。山寺保存会も同様に巡り大仏殿で仮眠の後、翌日下りながら開山堂、五大堂、本坊、垂水不動などを巡る。

また、現在は、念佛講の人たちだけの行事になっているが、昭和 50 年頃まではオツヤモウシといつて講中以外の人たちもオツヤキヤク（通夜客）として奥の院に上がってきたという。当時は夜行念佛の日はオツヤキヤクのために、性相院、中性院、金乗院、華藏院の 4 つの塔頭が開放され、部屋や廊下は大勢のオツヤキヤクであふれ、押入まで人が入って夜を明かしたという。オツヤキヤクはここで夜行念佛講の人たちが登ってくるのを待ち、到着すると賽銭をあげ、講の人たちの金剛杖や笠についているシデをもらった。

このシデで体を拭いて川に流すと無病息災になるとか、頭をなでると頭病み除けになる、子どもをなでてやると虫封じになるといわれていた。

講中は木綿の着物に黒袴、足元は草履に黒足袋を履く。この上に白木綿で作ったオユズリを着用する。金剛杖にシデをさげる。杖は地面にはつけないことになっている。講長は（伝）空也上人の巻物を下げる。回向の初めは讃声という先達が唱える。回向の合間に鉦先達が鉦をたたき、調子を整える。金剛杖は修行の時に亡なった場合の墓になるといわれている。

山寺夜行念佛の習俗は、盆の時期に行われてきた死者供養の行事であると考えられ、残されている石碑などからかつては山形県内各地で行われていた。

通常は、口伝のため残らないが、高擣講中には、明治時代からの諸記録 47 点が保存され、貴重な資料として、平成 18 年天童市有形民俗文化財に指定された。

令和元年 9 月 日本山岳修験学会山寺学術大会

天童市高擣夜行念佛講一同（文責 副講長 村山正市）

高擣夜行念佛のあゆみ

年号	西暦	事項
天文3	1534	山寺山王權現再興時、高擣夜行念佛始ると伝えあり
享保19	1735	安樂寺門前に南無阿弥陀仏（夜行念佛供養塔）建立 講を結成したと伝えられる。
寛保2	1742	安樂寺良三上人導師で供養塔建立
寛政4	1792	行者三太郎、安樂寺門前に供養塔建立
明治3	1870	千手院後藤長六より中性院立ち合いで巻物譲り受ける。 萩生田傳七他4名
明治4	1871	奥の院へ川東夜念佛講が常夜灯建立
明治5	1872	山寺中性院より「一札之事」文書で権利が永藏坊から山寺へ、五十嵐富治川東諸山総取締役
明治20	1880	村山専作所有の永藏坊からの夜念佛作法を石山松治書写
明治24	1891	「夜行講・奉納有志者取調証」を記す
明治37	1904	師匠見立傳七死去

高擣夜行念佛講再興 100年のあゆみ

年号	西暦	事項
大正5	1915	7月夜行念佛講再興される。発起者石山長之助、石山りさ、石山松治、石山鶴之助
		11月高擣村夜行念佛講規約制定、初代講長石山長之助 副講長岡崎善吉、顧問村山専作、五十嵐富治
大正6	1916	講旗を仕立てる。揮毫村山専作
大正7	1917	『夜行念佛回向』まとめる
大正12	1923	10月安樂寺門前に再興記念名号碑建立、開眼供養
昭和2	1927	講長石山長之助『夜行念佛御詠歌』発行
昭和6	1931	巻物、重要書類を総取締五十嵐富治より石山長之助譲り受ける
昭和10	1935	供養塔台座交換、灯篭建立
昭和28	1953	2代講長細谷四郎作
昭和38	1963	3代講長遠藤権三郎
昭和39	1964	安樂寺梵鐘法要
昭和50	1975	4代講長浅沼武雄
昭和57	1982	石仏寺開山七百年慶讚法要
昭和62	1987	5代講長瀬野勘七
平成4	1992	供養塔傾き修復、敷地整地
平成5	1993	6代講長遠藤仙作

平成 11	1999	文化庁「記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財」選択
平成 13	2001	3月 1日 天童市無形民俗文化財に指定
平成 13	2001	7代講長鈴木秀雄
平成 16	2004	県教育委員会「山寺夜行念佛の習俗」調査
平成 18	2006	史料や記録が天童市有形民俗文化財に指定
平成 18	2006	丸高歴史文化財団より顕彰状、助成金を頂く。
平成 20	2008	8代講長遠藤恒男
平成 20	2008	9月若松観音開山 1300年慶讚参詣
平成 22	2010	10月石仏寺高擧築城 600年祭記念仏教コンサート
平成 25	2013	5月立石寺根本中堂本尊薬師如来 50年 1回御開帳参詣
平成 26	2014	5月東日本大震災、女川、石巻慰靈供養参詣
平成 27	2015	再興 100周年記念事業
平成 28	2016	9代講長石山良守

(文責 副講長 村山正市)

顧問 遠藤恒男 講長 石山良守 副講長兼会計 村山正市

役員 石山俊男、山下文雄

佐藤学、野口一雄、遠藤文夫、遠藤敬知、遠藤正樹、村山吉春、細谷幸雄、見立良悦、瀬野恒二、大内啓司



「扇子の文字五編返し」

五編返し

南無阿・ 南無阿弥陀・ 南佛南・ 無阿弥陀・
南無阿弥陀・

御花回向

さかりなる・ はなの・ いろかも・ いよまし
て・ くさきも・ うかぶ・ みだのごくらく・
な・ むあみだ・ なむあみだ・

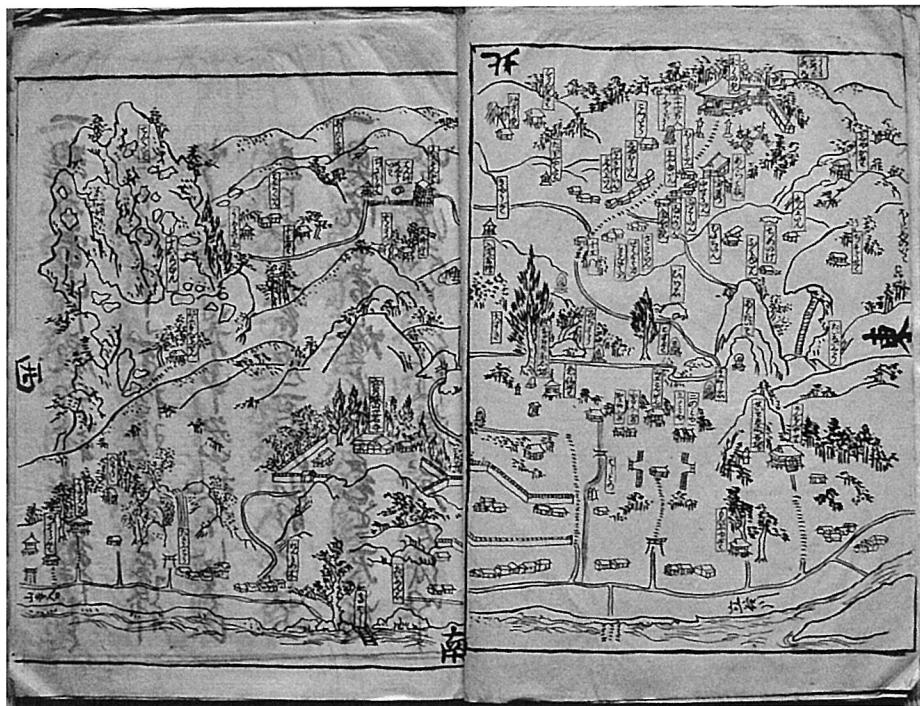
総回向

がんに・ しくどく・ ふぎょうおう・ えつさ
い・ がとうよしゅうじょう・ かいご・ じょう
ぶつどう
な・ むあみだ・ なむあみだ・

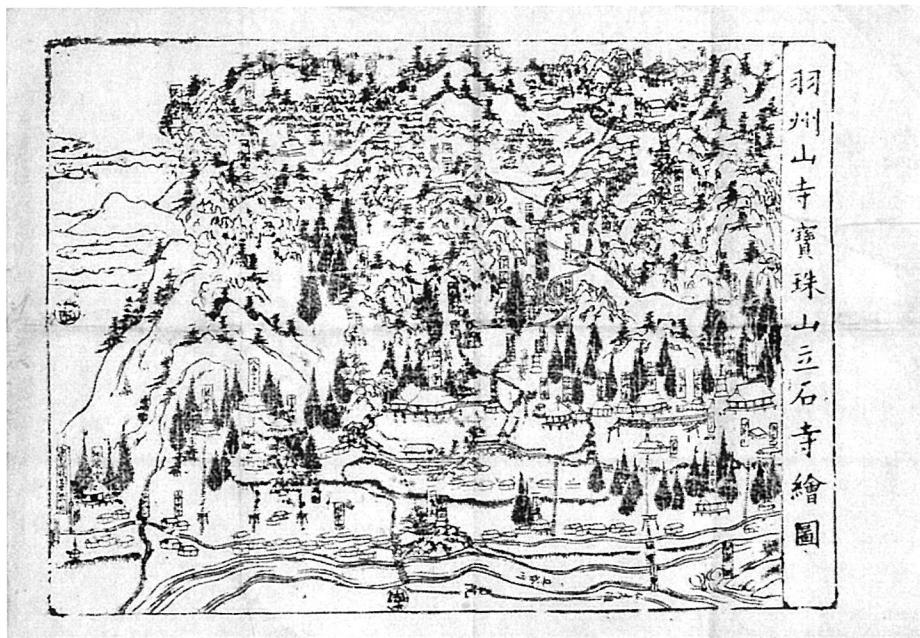
・ 錘を叩くところ

(大正五年高擣村『夜行念佛回向』より)

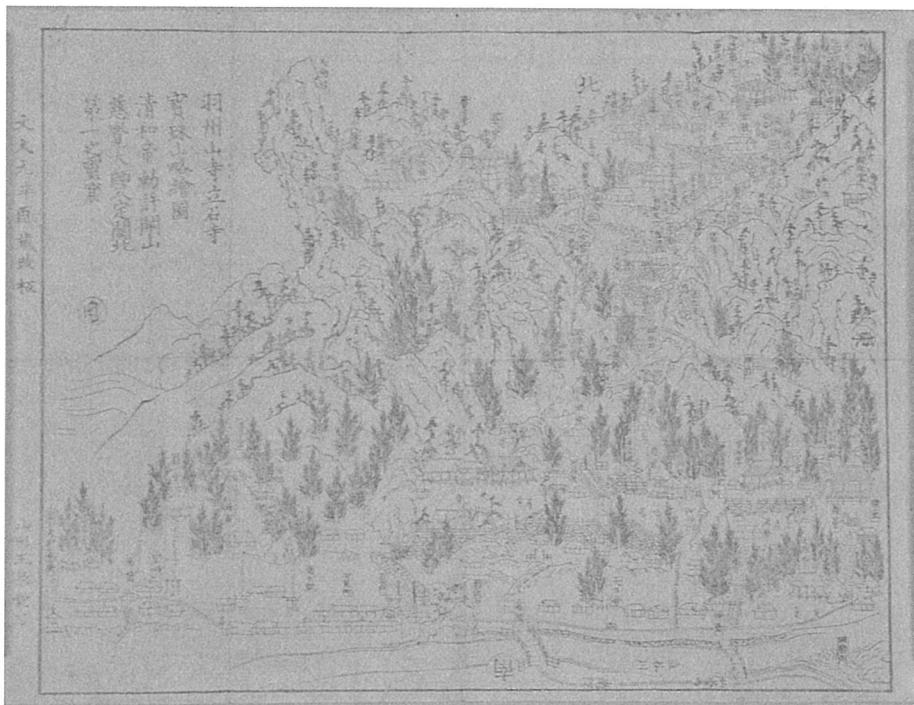
平成二十七年 高擣夜行念佛講再興百周年記念



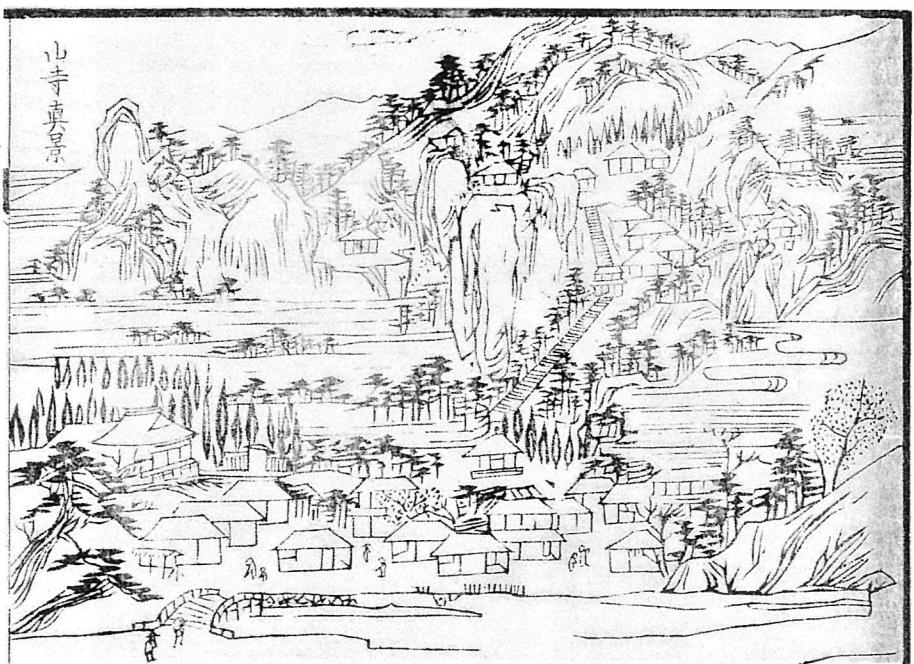
『山寺状』挿絵立石寺繪図（山形県立博物館蔵・同写真提供）



羽州山寺寶珠山立石寺繪圖（江戸時代方）山寺・井沢貞一氏蔵（写真提供：山形県博）



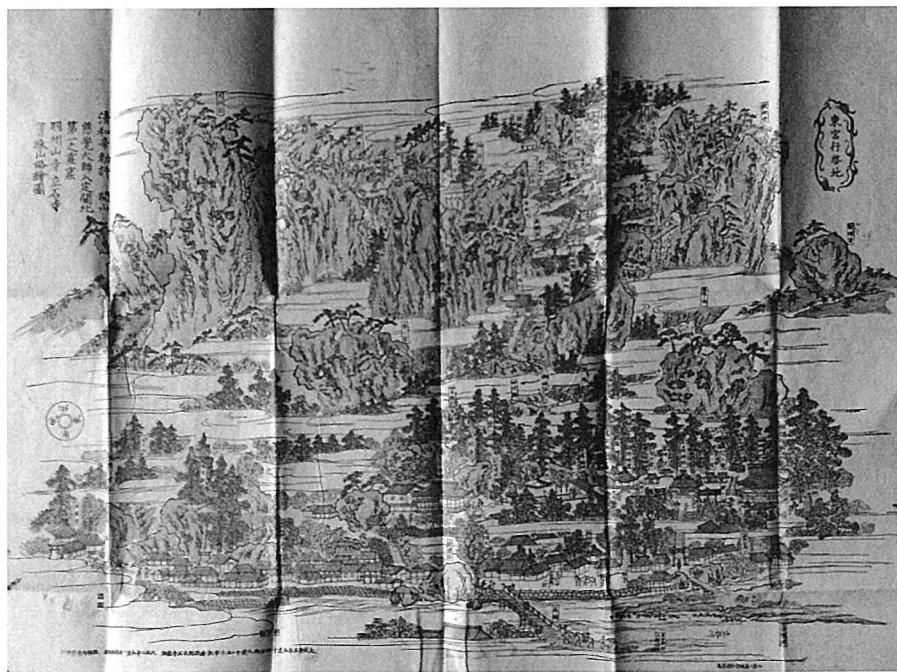
羽州山寺立石寺寶珠山略繪図（文久元年）山寺芭蕉記念館蔵・同写真提供



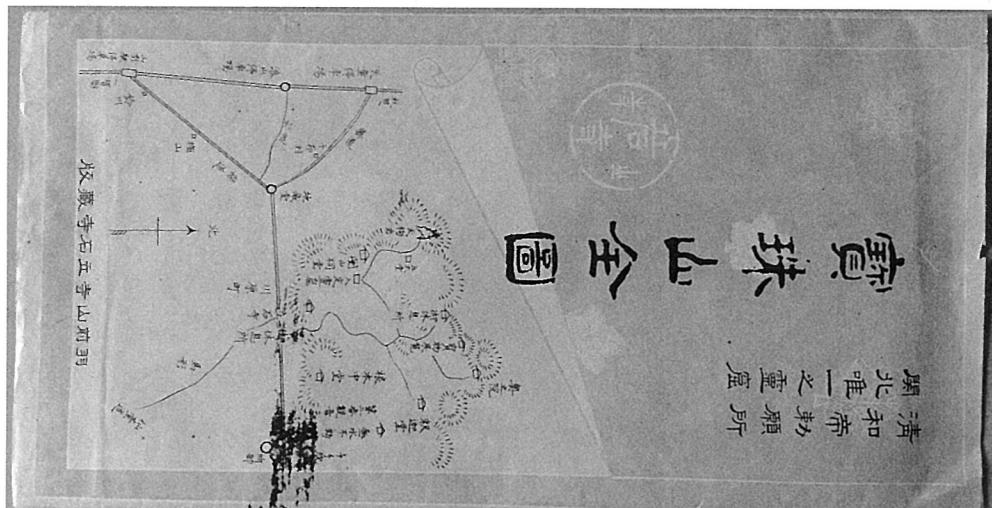
『山形縣地誌提要』挿絵 明治 11. 7 山形荒井太四郎編 天童市・笠原登氏蔵
写真提供：山形県立博物館



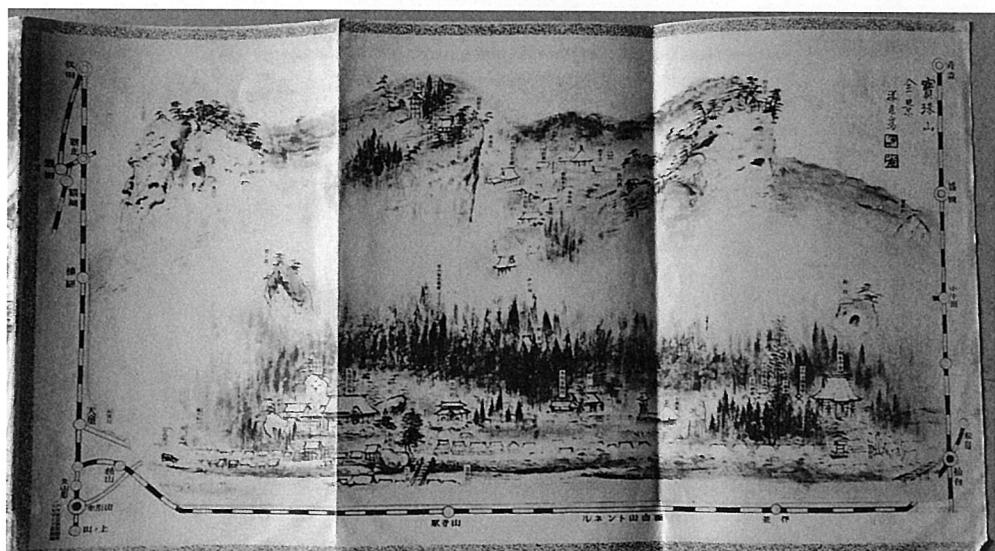
羽前山寺寶珠山立石之圖（明治34年）天童市・笠原登氏藏（写真提供：山形県博）



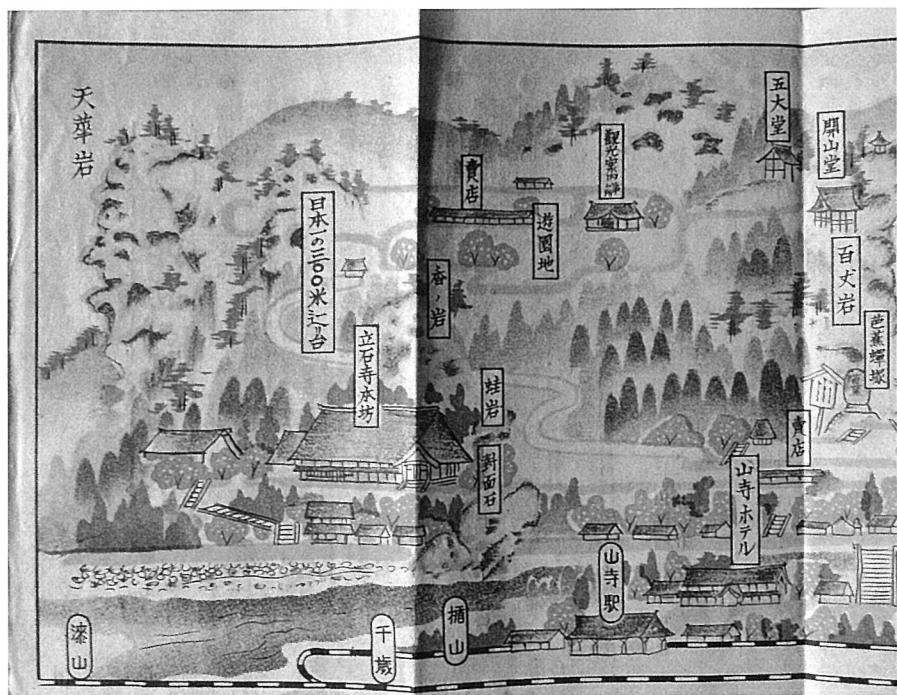
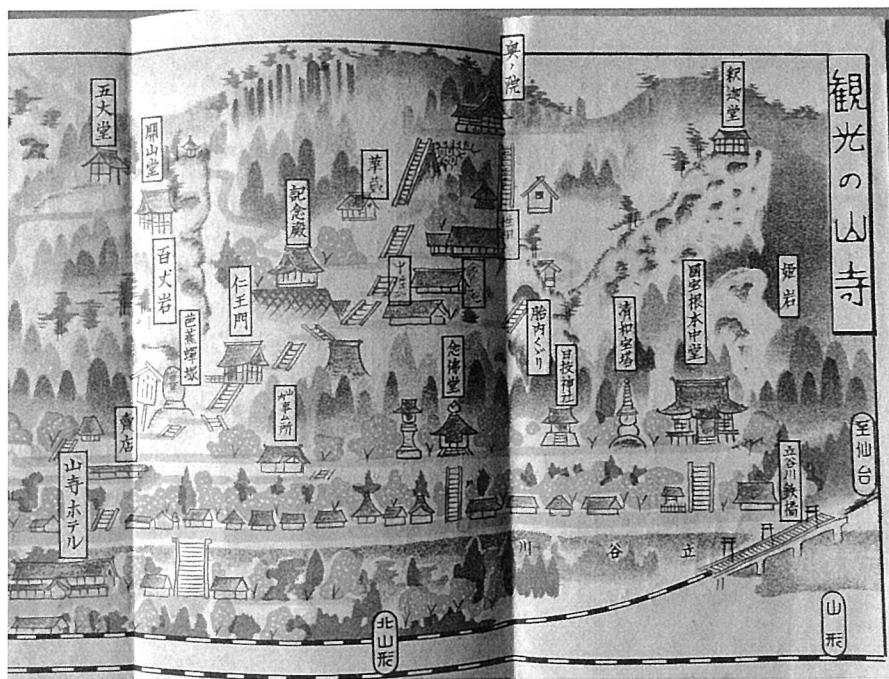
羽州山寺立石寶珠山略繪圖（大正2年）山形市・個人藏



羽州山寺立石寺寶珠山略繪圖（大正2年）外袋 山形市・個人蔵



「名勝史跡山寺」より 宝珠山全景 祥光寫（昭和10年代前半） 山形市・個人蔵



「觀光の山寺」(昭和20年代版) 山形市・個人蔵

山寺略年表（「特別展 山寺—歴史と祈り」山形県立博物館、を補訂）

- 860 貞觀 2年 慈覺大師円仁、四至を定め立石寺を開創する
- 1144 康治 3年 真語宗僧入阿大徳ら同法5人が妙法蓮華経を慈覺大師の靈廟の側に納入
- 1167 仁安 2年 定果坊が仏果僧進のため、立石寺に納経する
- 1205 元久 2年 立石寺本堂（根本中堂）の修営完了にあわせ、十二神将、七仏薬師如来坐像、日光・月光二菩薩などが造立される
- 1231 寛喜 3年 立石寺院主実賢が、木製曼荼羅懸仏を施入する
- 1257～1259 正嘉年間 北条時頼が立石寺に命じて改宗し、宝珠山阿所川院立石禪寺を称せしむ
正嘉年間 という
- 1332 元弘 2・ 正慶元年 立石寺院主・別当の両職に、識乗坊が幕府の命により任命される。当寺
が鎌倉將軍家の祈祷所であったことによるためか
- 1333 元弘 3・ 正慶 2年 立石寺院主・別当の両職を、識乗坊が出羽国司葉室光顕の国宣によって
安堵される
- 1334 建武元年 立石寺院主・別当の両職に、興円阿闍梨が、後醍醐天皇の綸旨によって
任命される
- 1336 延元元・ 建武 3年 立石寺院主・別当の両職が、足利尊氏の御教書により、識乗坊に還補さ
れる
- 1359 延文 4・ 正平 4年 立石寺如法經堂普賢、妙香菩薩のため、立石寺に銅鏡を施入する
- 1392 明徳 3・ 元中 9年 この年、山寺峯の裏洞窟に五輪塔が造立される
- 1435 永享 7年 立石寺山王権現に鉄鉢が奉納される
- 1519 永正 16年 立石寺岩屋三重小塔、淨運らによって造立され、種字は釈迦如来を刻す
- 1521 大永元年 天童頼長ら、山寺立石寺を攻め、一山悉く焼き尽くす
- 1528 大永 8年 この年、伝教大師画像が作成される
- 1534 天文 3年 立石寺日枝神社が、山形、中野、東根、高崎各氏らの援助を受けて修造
される
- 1543 天文 12年 天台座主二品法親王、立石寺権律師実範を法院職に補任する。立石寺の
圓海は、最上義守、同母の助成を得て比叡山に登拝、根本中堂の燈火を
分火し、海上を輸送した後、立石寺に納火する
- 1570 元亀元年 最上義光、「本懐」成就の願文を、立石寺に捧げる
- 1571 元亀 2年 織田信長、延暦寺衆徒が朝倉義景に党するを憎み、これを攻めて堂塔を
焼く
- 1573 元亀 4年 立石寺山王神社が再興され、棟札が納められる
- 1585 天正 13年 立石寺衆徒らは、比叡山本願僧正豪盛から、再造する根本中堂の常燈を
進納するように命じられ、進納する旨を伝え、山寺立石寺の法燈を延暦

寺の中堂へ移火する

- 1586 天正 14 年 最上義光、高擣小僧丸として山寺立石寺に油田 2 貫 850 文を寄進する
- 1589 天正 17 年 比叡山執行法印豪盛は立石寺繁栄を願い、遺文をしたためる
- 1599 慶長 4 年 最上義光、立石寺納経堂をおさめる
- 1605 慶長 10 年 日野左衛門尉、山寺清鏡坊の畠地を買い、山寺宝常坊へ寄進する
- 1608 慶長 13 年 安食大和守光信、山寺立石寺へ法華經 8 卷を奉納し、楯岡光直、最上義光の長寿を祈願し、山寺の立石寺根本中堂に鰐口を奉納する
- 1611 慶長 16 年 最上義光、根本中堂を修造したか（梁材墨書から）
- 1622 元和 8 年 立石寺、一山領の「田帳」を調製する
- 1689 元禄 2 年 俳聖松尾芭蕉、尾花沢より山寺を訪れ、立石寺を詣でて名句を詠む
- 1698 元禄 11 年 幕府、立石寺に命じて、日光・月光両菩薩、十二神将を東叡山寛永寺に還座させる
- 1726 享保 11 年 松本一笑軒の著「山寺状」、洛陽書林から出版される
- 1750 寛延 3 年 立石寺学頭惟識院宣雄・役僧中性院、寺領支配をめぐる騒動により、衆徒らに殺害され、山寺立石寺の騒動の一件について、吟味役として青嶋善蔵ら漆山陣屋に来り、山寺で吟味する
- 1752 宝暦 2 年 漆山代官平岡彦兵衛、立石寺騒動の一件の主謀者らを処刑する
- 1845 弘化 2 年 立石寺院主壬生優田、銅町の鋳物師小野田平左衛門に銅製宝燈を製作させ、境内に建立する
- 1869 明治 2 年 立石寺奥の院如法堂が焼失する
- 1870 明治 3 年 神仏分離令によって僧徒の神勤が停止し、山王権現が独立して日枝神社となり、仏像は中堂に移される
- 1872 明治 5 年 山中の 11 坊が坊号を返上し、帰農を願い出る
- 1890 明治 23 年 宮内省より根本中堂保存料として 250 円が下賜される
- 1908 明治 41 年 立石寺根本中堂が国の特別保護建造物に指定される
- 1915 大正 4 年 立石寺如法經所碑が国宝に指定される
- 1932 昭和 7 年 立石寺一山が国の名勝史跡に指定される
- 1948 昭和 23 年 県の史跡名勝天然記念物調査委員会が設置され、慈覚大師入定窟が調査される
- 1950 昭和 25 年 立石寺如法經碑が国の重要文化財に指定される
- 1951 昭和 26 年 立石寺根本中堂が国の重要文化財に指定される
- 1952 昭和 27 年 三重小塔が国の重要文化財に指定される
- 1961 昭和 36 年 立石寺根本中堂の修復工事が実施される
- 1978 昭和 53 年 三重小塔が修復される
- 2016 平成 28 年 山寺行啓記念殿が修復され、山形市有形文化財に指定される
- 2018 平成 30 年 「山寺が支えた紅花文化」が日本遺産に認定される

山寺に関する記述内容の比較（鈴木岩弓「山寺と死者供養」『特別展 山寺』より）

年	著者	著作名	碑	卒塔婆 供養	後生車 奉納	歯骨	骨	納骨場所	納骨時期	夜行念佛	シシ踊り
1668	松山政也	松山坊秀句	○								
1702	松尾芭蕉	おくのはそ道									
1712	寺島良安	和漢三才図会									
1722	橋 三喜	一宮巡詣記									
1726	松本一笑軒	山寺状	○	○				こつとう			
1772	中山大陽	奥游日録	○								
1762	進藤重記	出羽国風土略紀	○	○							
1785	木村謙次	奥羽美折記									
1792	里見光当	乱捕出羽国風土略紀	○								
1808		羽州山寺 立石寺縁起									
1816	野田泉光院	日本九峰修業日記									
1865	江川彌三郎	羽州山寺立石寺寶珠山略絵図									
1901	岡 千仞	山寺攬勝志			○			骨堂			
1906	吉田東伍	大日本本地名辞書	○					納骨堂			
1908	伊澤栄次	山寺名勝志									
1910	山形県	山形県名勝誌	○		○			納骨堂			
1914	加藤咄堂 山形県文化 遺産保存協 会	日本風俗志 山寺の入定窟調査について								○	
1951	伊澤不忍	慈覚大師と東北文化									
1963	鈴木寅之助	山寺史跡名勝誌	○		○	○		納骨堂		○	
1969	櫻井徳太郎	口寄せ巫女の生態			○						
1975	佐藤美津子	山と祖靈信仰		○	○				百ヶ日		
1977	大友義助	羽州山寺における庶民信仰の一考察	○	○	○	○		奥院／納骨堂	四十九日忌以内	○	○
1980	最上孝敬	詣り墓(増補版)	○	○	○			奥院／納骨堂		○	
1983	渡辺茂蔵	山形県大百科事典	○	○	○						
1990	平凡社編	山形県の地名	○	○		○		奥院		○	
1990	月光善弘	羽州靈場山寺の歴史		○	○					○	
2002	相原一士	山寺の葬儀			○			奥院	四十九日後		
2002	野口一雄	葬送と納骨儀礼	○		○			奥院			
2005	大友義助	山寺の歴史と庶民信仰	○	○	○	○	○	奥院		○	○

山寺関係参考文献（『山寺—歴史と祈り—』山形県立博物館、を補訂）

単行本

- 岡 千仞 『山寺攬勝志』保祐社 1901 年
 伊澤栄次 『山寺名勝志』保祐社 1908 年
 伊豆田忠悦 『山寺の歴史』山寺歴史会 1992 年
 岩鼻通明 『絵図と映像にみる山岳信仰』 海青社 2019 年
 小形利吉 『山形市街十景と山寺』 郁文堂書店 1988 年
 月光善弘 『東北一山寺院の研究』 佼成出版社 1991 年
 上川通夫 『日本中世仏教と東アジア世界』 城文房 2012 年
 五来 重 『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究—地上発見物篇—』 法藏館 1964 年
 狹川真一 『中世墓の考古学』 高志書院 2011 年
 佐々木太四郎 『山寺・立石寺千手院考』 田宮印刷所 1984 年

- 佐藤弘夫 『靈場の思想』 吉川弘文館 2003 年
大東俊一 『日本人の聖地のかたち』 彩流社 2014 年
千歳 栄 『慈覚大師円仁 追憶の情景』 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2006 年
戸川安章 『出羽三山修験道の研究』 佼成出版 1973 年
戸川幸夫 『高安犬物語』 全国図書館協議会 1954 年
菅田慶信 『中世奥羽の仏教』 吉川弘文館 2018 年
山口博之 『中世奥羽の墓と靈場』 2017 年
湯之上隆 『日本中世の政治権力と仏教』 思文閣出版 2001 年

県史・市町村史関連

- 東村山郡役所 『東村山郡史』 名著出版 1972 年
山形県 『山形県史』 資料編 15 上 (古代中世史料) 山形県 1977 年
山形県 『山形県史』 資料編 15 下 (古代中世史料) 山形県 1979 年
山形県 『山形県史』 通史編第 1 卷 山形県 1982 年
山形県 『山形県史』 年表編別編Ⅲ 山形県 1989 年
山形市史編さん委員会ほか 「山寺立石寺所蔵文書目録」 (『山形市史編纂資料』 第 23 号) 山形市 1971 年
山形市史編さん委員会ほか 「最上千種」 (『山形市史編纂資料』 第 31 号) 山形市 1973 年
山形市史編さん委員会ほか 『山形市史』 上巻 山形市 1973 年
山形市史編さん委員会ほか 『山形市史』 年表・索引編 1980 年
山形市史編さん委員会ほか 「山形石ひろい」 (『山形市史資料』 第 64 号) 1982 年
山形市史編さん委員会ほか 「羽州山寺立石寺文書」 (『山形市史資料』 第 68 号) 1984 年
天童市史編さん委員会 『天童市史』 上巻 1981 年
羽黒町 『羽黒町史』 上巻 1992 年
渡邊留治 『朝日村誌』 一 湯殿山 1964 年
写真集「山寺の歴史」編集委員会 『写真集「山寺の歴史」』 写真集「山寺の歴史」編集委員会 1995 年
山寺の五十年編集委員会 『山寺市合併 山寺の五十年』 山寺地区振興会 2006 年

報告書

- 山形県教育委員会 『山寺の入定窟調査について』 (史跡名勝天然記念物調査報)

告書第1号)

山形県教育委員会 1950年

山形県教育委員会 『山寺夜行念佛の習俗調査報告書』 山形県教育委員会
2005年

山形県文化財保護協会 「山寺文化財総合調査報告」(『羽陽文化』104・105号)
山形県文化財保護協会 1976・77年

山形県文化財保護協会 『山寺千手院総合調査報告書』 山形県文化財保護協
会 2008年

(財) 山形県埋蔵文化財センター 『中地蔵遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵
文化財センター調査報告書第77集 (財) 山形県埋蔵文化財センター 2000
年

(財) 文化財建造物保存技術協会 『重要文化財立石寺三重小塔保存修理工事
報告書』 立石寺 1980年

立石寺中堂修理委員会 『重要文化財立石寺中堂修理工事報告書』 山形県
1962年

山形県藤島町教育委員会 『中山廃寺跡発掘調査報告書』 山形県藤島町教育
委員会 1982年

天童市教育委員会 『高野坊遺跡発掘調査報告書』 天童市教育委員会 1998
年

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 『佛向寺の墓標調査報告書－
天童市域における墓標の成立と展開－』 東北芸術工科大学文化財保存修
復研究センター 2007年

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 『山形市仏像詳細調査報告書』
東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 2006年

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 『山形市仏像詳細調査報告書
(追補版)』 東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 2008年

東北歴史資料館 『名取新宮寺一切経調査報告書』 東北歴史資料館 1980年
名取市教育委員会 『名取市文化財調査報告書』 23 名取市教育委員会 1988
年

八葉寺五輪塔調査委員会 『会津八葉寺木製五輪塔の研究』 万葉堂書店 1973
年

図録

東北歴史資料館 『名取の里 熊野信仰と一切経』 東北歴史資料館 1980年
東北歴史資料館 『東北地方の仮面－芸能と祈りとこころ－』 東北歴史資料
館 2000年

「慈覚大師円仁とその明宝」企画委員ほか 『慈覚大師円仁とその明宝』 N
HKプロモーション 2007年
山形県立博物館 『山寺—歴史と祈り—』 山形県立博物館 2009年

論文・その他

- 相原一士 「中世期の靈場と靈地をめぐってー村山地域南部を主としてー」(『さあべい』第20号) 山形県文化振興事業団 1999年
- 相原一士 「山寺の墓標」(『村山民俗』第16号) 村山民俗学会 2002年
- 相原一士 「資料紹介『山寺 寶珠山立石寺図』」(『山寺芭蕉記念館紀要』第4号) 山形県文化振興事業団 2005年
- 荒木志伸 「山寺立石寺」(『季刊考古学』121号) 2012年
- 荒木志伸 「山寺立石寺の靈場変遷と景観」(『考古学雑誌』96-4) 2012年
- 居駒永幸 「つながった山寺獅子踊りの消失の輪ーその民俗と由来書と平塩永藏坊文書ー」(『山形民俗』第11・12号) 山形県民俗研究協議会 1999年
- 居駒永幸 「民俗芸能と修験の知ー平塩永藏坊の獅子踊由来書をめぐってー」(『村山民俗』第14号) 村山民俗学会 2000年
- 石田茂作 「修験道と東北文化及び山寺の笠塔婆」(『羽陽文化』12号) 山形県文化財保護協会 2000年
- 市村幸夫 「村山地方の『山立根元之巻』」(『山形民俗』第22号) 山形県民俗研究協議会 2008年
- 伊東史朗 「入定窟の慈覚大師頭部について (特集 円仁と仏教美術)」(『仏教芸術』300) 2008年
- 茨木光裕 「中世期の靈場と靈地をめぐってー村山地域南部を主としてー」(『さあべい』第20号) さあべい同人会 2003年
- 岩鼻通明 「紀行文と旅日記にみる立石寺」(『村山民俗』第15号) 村山民俗学会 2003年
- 大友義助 「羽州山寺の庶民信仰について」(『山形県立博物館研究報告』第4号) 山形県立博物館 1976年
- 大友義助 「羽州山寺における庶民信仰の一考察」(『山形県民俗・歴史論集』第1集) 東北出版企画 1977年
- 大友義助 「山寺の歴史と庶民信仰」(『山寺夜行念佛の習俗調査報告書』) 山形県教育委員会 2005年
- 奥村幸雄 「修験系寺院と山中地界観」(『仏教民俗学大系』7) 名著出版 1992年
- 加藤和徳 「板碑『山寺窟』の拾遺記ー山寺型板碑の存在についてー」(『山寺

- 芭蕉記念館紀要』第9号) 山形文化振興事業団 2004年
- 加藤和徳 「山形市山寺の中世石造物集録」(『さあべい』第21号) さあべい
同人会 2004年
- 勝野隆信 「慈覚大師の遺骨と立石寺の諸問題」(『日本歴史』22号) 日本歴
史学会 1950年
- 勝野隆信 「慈覚大師の首」(『日本歴史』24号) 日本歴史学会 1950年
- 月光善弘 「羽州靈場山寺の歴史」(『宗教と文化—斎藤昭俊教授還暦記念論文
集—』) こびあん書房 1990年
- 兼康保明 「立石寺入定窟の金棺とその被葬者」(『考古学ジャーナル』150)
2000年
- 川崎浩良 「山寺入定窟の問題」(『羽陽文化』1巻4号) 山形県文化財保護協会
1949年
- 川崎利夫 「山寺の『磐司祭』を観る」(『羽陽文化』6号) 山形県文化財保護
協会 1950年
- 菅野成寛 「平安期の奥羽と列島の仏教」入間田宣夫編『兵たちの極楽浄土』
高志書院 2010年
- 北畠教爾 「慈恩寺修驗覚書」(『西村山の歴史と文化』II) 西村山地域史研
究会 1991年
- 斎藤 仁 「戦国期における出羽国立石寺の様相と近世的変容」(『歴史』126)
2016年
- 櫻井徳太郎 「口寄せ巫女の生態」(『日本民俗学会報』64) 日本民俗学会 1969
年
- 佐竹義治 「立石寺門前町の発達と機構」(『地理学研究』第2・3号合併号)
山形地理学会 1957年
- 佐藤美津子 「山と祖靈信仰」(『東北民俗資料集』(四)) 萬葉堂書店 1975年
- 鈴木岩弓 「『もり供養』における(伝承)をめぐって」(『東北民俗』第16輯)
東北民俗の会 1982年
- 鈴木岩弓 「『もり供養』の一考察—参詣者の行動と意識をめぐって—」(『日本
文化研究報告』別巻第19集) 東北大学 1982年
- 関口真大 「慈覚大師贊仰の一側面」(福井康順編『慈覚大師研究』) 天台学
会 1964年
- 大東俊一 「日本人の死生観に関する一考察」(『人間総合科学』18) 2010年
- 武田喜八郎 「山寺立石寺の復興と、一相坊円海(実範)について」(『山寺芭
蕉記念館紀要』3号) 1998年
- 竹田賢正 「山寺夜行念佛の習俗と平塩永蔵坊文書」(『中世出羽国における時
宗と念佛信仰』) 光明山遍照寺 1997年

- 竹田賢正 「羽州靈山立石寺における庶民信仰の源流－文書文言「他宗」を視座として－」(『山形県地域研究』12号) 山形県地域史研究協議会 1986年
- 田中久夫 「納骨の風習の成立過程に関する一考察－平安末期を中心として－」(『日本民俗会報』66) 日本民俗学会 1969年
- 永井康雄 「山寺立石寺の最上義光靈屋について」(『日本建築学会東北支部研究報告集計画系』78) 2015年
- 長岡龍作 「みちのく・肖像の風景」三浦秀一他編『東北人の自画像』東北大出版会 2010年
- 長坂一郎 「立石寺 木造慈覚大師頭部について」千歳栄編『慈覚大師円仁 追慕の情景』東北芸術工科大学東北文化研究センター 2006年
- 長坂一郎 「山形・立石寺根本中堂木造毘沙門天立像について」東北芸術工科大学文化財保存修復センター『山形市仏像詳細調査報告書(追補版)』2009年
- 長坂一郎 「山寺立石寺五大堂岩窟内木造地蔵菩薩および冥官像－中世・立石寺の靈場形成について」『山形市文化振興事業団紀要』14号 2013年
- 野口一雄 「葬送と納骨儀礼－『神式で葬式を行う地区』と『歯骨納めの寺』－」(『村山民俗』第16号) 村山民俗学会 2002年
- 藤田定興 「聖地納骨と木製小塔」(『仏教藝術と美術(仏教民俗学大系5)』)名著出版 1993年
- 堀 一郎 「中尊寺金色堂長押内発見の火葬人骨、納骨器、及び笹塔婆について」(『宗教・習俗の生活規制』) 未来社 1963年
- 松尾剛次 「立石寺絵図にみえる『阿所川院』」(『山形県地域史研究』24) 山形県地域史研究協議会 1999年
- 村木志伸 「山寺奥の院の石塔婆について」(『名勝及び史跡 山寺石積み崩落復旧工事報告書』) 天台宗宝珠山立石寺 2005年
- 山口博之 「山形市山寺発見の旧石器」(『山形考古』第4巻第3号) 山形考古学会 1989年
- 山寺峯の浦地区文化財調査会 「山寺峯の浦地区本院遺跡の第1次発掘調査報告」(『さあべい』27号) 2011年
- 吉田歓他 「靈地・靈場の考古学－山寺立石寺とその周辺 総合討論の記録(特集 日本考古学協会2009年度山形大会報告)」(『山形考古』9-2) 2010年
- 国立歴史民俗博物館 「日本古代出土・伝世印集成一覧」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』第79集) 国立歴史民俗博物館 1999年
- 国立歴史民俗博物館 「宗教者の身体と社会」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集) 国立歴史民俗博物館 2008年

発表要旨・資料集

日本山岳修験学会山寺立石寺学術大会

2019年8月31日

編 集 日本山岳修験学会山寺立石寺学術大会実行委員会・

村山民俗学会事務局

山形市相生町2-10 岩鼻方

印刷所 株式会社ユリクリエイト

東京都世田谷区松原1-56-9